展望

産学官連携の強化に期待

齋藤 俊次郎

IT産業の行き詰まりが主原因の世界的な景気低迷に加え、中国を中心とした安価で豊富な労働力とその製造技術力の目覚ましい向上により、我が国の素材、部品及び機器を中心とした製造業が苦境に陥る様になってきた。そこで今後の我が国産業の存在価値をどこに置くか再検討すべき時である。

もともと我が国は資源が乏しく当学会が協会として昭和八年に設立された時も、我が国の限られた資源の一つである水力資源を生かして作り出される貴重な電力を基に、電解工業を我が国の主要産業の一つに育てようと国を挙げての努力が払われ期待通りの産業規模となった。

その後我が国の新しい産業として大きく開花した一つがエレクトロニクス産業だが、その発展に果たしたフェライト材料の役割は大きい。フェライトは先に述べた電解工業の進歩の中で亜鉛精錬の効率を上げる為に、当学会の設立にご尽力された東京工業大学電気化学科主任教授加藤与五郎先生と武井武先生が進められた研究の中から生まれた世界に誇れる独創的な発明であった事は皆様良くご存知の通りである。この様に電気化学の研究の中で生まれた新規磁性材料フェライトがエレクトロニクス産業の必須素材となった事は画期的な成果であった。しかも当時としては非常に稀な産学協同という形で製品化が進められた。

これ等の事柄に加えて多くの先達のご努力と経済環境条件にも恵まれ、その後我が国の経済力は飛躍的に向上した。そこで我が国の産業規模、独特な経営理念、材料及び工法技術、生産技術、品質管理手法等が日本の経営の総合力と高い評価を受け、多くの国々が見習うようになった。

しかし最近になって世界各国の政策転換や重要な技術が広く民需に活用される様になり、先進国に於けるネットワークやソフトウェア等の驚異的な進歩と圧倒的な強さ、発展途上国の意識改革による製造業への貢献等により、我が国の製造業の立場は様変わりした。すなわち既に雇用条件が上昇した我が国の産業が果たせる役割には自ずと限界が生まれてきてしまった。

しかも世界的な大競争時代になると、次のニーズは何かの探索や開発活動も活発になり、各国企業は新規市場へ競って参入する様になってきた。我が国もこの流れに対応すべく成熟した技術や製品は海外生産に移行しコスト上昇を補う様に努めたり、R&D活動の国際化も強力に推進し始めた。しかも昨今の様にスピーディにしかも大きく変化する経済環境に於いて我が国の企業が果たすべき役割は何かを改めて問い直すべき時期だと思う。

その結果これからも我が国の産業が世界的に然るべき存在となり続ける為の方策の一つとして、まず産学官の連携を更に密にし、世の中のニーズを先取りし他国には成し得ないハードウェア中心の知的財産の獲得強化と新製品の創出に全力を尽くすことが必要と考える。

Shunjiro SAITO
本会 2002 年度会長
TDK 株式会社
専務取締役